

儒教的観点から見た康熙朝初期の正統性を めぐる諸問題(上)

Various Issues Surrounding the Legitimacy of the Early Qing as Viewed
from a Confucian Perspective

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

ABSTRACT

With the Kangxi emperor as the focus, this paper seeks to examine wherein the Qing dynasty derived its legitimacy to rule China. First, during the reign of the Shunzhi emperor, no clear account was provided of its legitimacy to rule China. During Kangxi's subsequent reign it was decided to position the Qing dynasty in the context of traditional theories of legitimacy, and thus secure legitimacy for the dynasty. However, Kangxi's plan was frustrated before it had been executed. Finally, the Yongzheng emperor identified receipt of the absolute authority of "heaven's mandate" (tianming) as underpinning the legitimacy of the Qing dynasty, and thus provided a formulaic conclusion to the matter. The paper also investigates how, in the process leading up to this final conclusion, various officials affiliated with "dao learning" (daoxue) brought forth theories of legitimacy that accorded with Kangxi's views while also combining these theories with new political ideas that had been developed.

はじめに

清王朝の中国支配の正統性はどこに求めればよいのか。北京に侵出したばかりの清王朝は、対立する明の残存政権と漢民族を念頭において自己の正統性を主張した。しかし、順治帝の時代には決定的な結論は提出されなかった。清王

朝が異民族政権であるということが、問題を複雑化したのである。

その後を継いだ康熙帝は、康熙二十年代末までは儒教的な立場から道徳による統治を行なおうとする。そこで、儒教官僚たちは、康熙帝が目指した徳治、いわゆる王道と清王朝の正統性とを結びつけた理論を持ち出す。

そもそも正統論は、北宋の歐陽脩（景德四年〔一〇〇七〕～熙寧五年〔一〇七二〕）が新しい理論を提出して以来、「正（道徳性）」と「統（統一）」という二つの要素が含まれることになった。そして、歐陽脩は、統一を前面に出して北宋王朝の成り立ちを理論づけ、南宋の『資治通鑑綱目』は、道徳性に重点を置いて、南半分に迫いやられた立場を説明する。また、元末の漢民族の楊維禎（元・元貞二年〔一二九六〕～明・洪武三年〔一三七〇〕）は、漢民族の立場から異民族の元の正統性を証明しようとした。だが、それは異民族は被支配者である漢民族の精神（道統）を受け継ぎ、精神的にそれに従属しなければならないという大前提のうえでのものであった。明初の方孝儒（元・至正十七年〔一三五七〕～明・建文四年〔一四〇二〕）になると、『資治通鑑綱目』の立場を推し進めたうえで、道統の継承が正統性を示すという楊維禎の考えを発展させ、君主が道統を承けていることが正統性の証明であるとした。明末には、正統の体现者が君主から聖人へと変化する。そのうえ、異民族の元王朝を追い出して中国を統一した明王朝の性格から激しい攘夷思想（夷夏の別）が加えられた。それは、明末の社会情勢からさらに過激化する。こうして、清王朝が中国を支配するようになった時期には、いわゆる道統を継承する聖人の存在がその王朝の正統性を表わすというようになってきた。

康熙朝初期の儒教官僚たちは、この正統性を保障する道統を継承している聖人に康熙帝をなぞらえた理論を提出したのである。以下で検討するが、まず熊賜履がこのことに言及して、康熙帝の知遇を受ける。

拙稿では、まず順治帝の時期には、どのように中国支配の正統性が考えられたのかを検討し、続いて、康熙帝に提出された熊賜履の理論の検討を行ない、康熙朝初期の正統性についての様々な問題について考察してみたい。

（1）

清王朝が自己の正統性を唱えようとした場合、困難なことが存在した。明代から特に激しく加えられるようになった華夷の別に対して、異民族の立場からそれを乗り越えて正統論を主張しなければならなかったことである。さらに、清王朝の場合、前の明王朝を批判して正統性を主張すると、現在の被支配者である漢民族の立てた王朝を批判することになる。人口比率ではきわめて小さい満州族の政権である清王朝にとっては、それは避けておきたいところである。では清王朝は、それをどのように解決しようとしたのであろうか。

本格的な中国支配が始まって八十年ほど経過した時になされた雍正帝（康熙十七年〔一六七八〕～雍正十三年〔一七三五〕）の主張が、清王朝の最終的な公式見解であると考えられる。そこで、先ず雍正帝は漢民族に対してどのように説明しようとしたのかを検討してみたい。

雍正帝は、『大義覺迷録』において、「逆書に『明〔朝〕の君 徳を失いて、中原 陸沉す。夷狄 虚に乗じて我が中國に入り、神器を竊み抛る』と云う」（『大義覺迷録』巻一・三十九葉）の批判に対して、次のように答えている。

是れ本朝（清）の明に於けるや、報復の義を論ずれば、則ち敵國爲り。交往の禮を論ずれば、則ち與國爲り。本朝の天下を得しこと、之を成湯の桀を放ち、周武の紂を伐つに較ぶれば、更に「名 正しくして、言 順う」（『論語』子路篇）と爲す。況んや本朝 並びに天下を明に取るに非ざるなり。崇禎〔帝〕 國に殉じ、明の祚 已に終う。李自成 僭偽して北京に號し、中原塗炭し、咸な眞主が民の爲に残を除き虐を去るを得んことを思う。太宗文皇帝（ホンタイジ） 萬姓の水火の中に沉溺するに忍びず、命じて將に師を興し、以て禍亂を定めんとするや、干戈の指す所、流賊 望風して遁る。李自成 追兵の殺す所と爲り、餘黨 解散す。世祖章皇帝（順治帝） 京師に駕入し、畿輔を安輯す。億萬の蒼生 咸な再生の幸を獲、崇禎帝 始めて禮を以て殯葬さるを得。此れ本朝の明の爲に「怨みに報い恥を雪ぎ」

(『戦国策』燕策), 大いに明に造^なす有る者なり。是を以て當時の明の臣民・達人・智士, 帖然として心服し, 輸誠 (帰順する)・向化せざるは罔し。今の臣民, 若し果たして先世に明の高爵厚禄を受け, 明の徳を忘れざる者有れば, 正に當に本朝の明の爲に仇に復するの深恩に感戴すべし。應に更に異説有るべからざるなり…… (『大義覺迷録』 卷一・三十九葉~四十葉)。

清は明から政權を奪ったのではない。明に代わって仇を滅ぼした結果であるとする。だから, 清の治世に生きている人々は, 明のために仇に報いた恩に感謝して, 批判してはいけないという。

さらに, 「逆書に云う『夷狄 異類なれば, 冒 (ののし) ること禽獸の如くす』と」 (『大義覺迷録』 卷一・四十葉) という批判に対しては次のように述べる。

……若^かの夫れ本朝は關外の創業より以來, 仁義の心を存し, 仁義の政を行なう。即ち古昔の賢君・令主も亦た能く我が朝と倫比するもの罕なり。且つ中國に入りてより已に八十餘年, 敷^{ひろ}く猷 (はかり) て教えを布き, 禮樂 昌明にして, 政事・文學の盛んなること, 燦然として備擧す。而るに猶お異類・禽獸と爲すと謂うを得んや。孔子 曰く「夷狄の君有るは, 諸夏の亡きが如くならざるなり」①と。是れ夷狄の君有るは即ち聖賢の流と爲し, 諸夏の君亡きは即ち禽獸の類と爲す。[ということは夷狄・諸夏の區別は] 寧に地の内外に在らんや。『書』(蔡仲之命) に「皇天 親無し, 惟だ徳を是れ輔く」と云う。本朝の天下を得るは, 徒に兵力を事とするのみに非ざるなり。太祖高皇帝 (ヌルハチ) が開創の初め, 甲兵は僅かに十三人, 後に九姓の師を合わせて, 明の四路の衆を敗る。世祖章皇帝 (順治帝) の京師に入るの時に至りて, 兵 亦た十萬に過ぎず。夫れ十萬の衆を以て, 十五省の天下を服すは, 豈に人力の能く強うる所ならんや。實に道德もて感孚すれば, 皇天 眷顧し, 民心率従するを爲して, 天と人と歸す。是を以て一たび京師に至れば, 明の臣民 咸^{みな}な我が朝の爲に力を効して馳驅す。其の時, 士卒を統領する者は, 即ち明の將弁 (武官) なり, 堅^こを披^{くわ}り鋭を執る (よろいをつけ武器を執る) 者は, 即ち明の甲兵 (軍隊) なり。此れ皆な天に應じ時に

順い②、大義に通達し、本朝の一統・太平の業を成すを補佐す。而して其の人亦た名を竹帛に標し、勲を鼎彝に勒す。豈に之を賢と謂わずして、禽獸を以て之を目するを得んや……（『大義覺迷録』巻一・四十一葉～四十二葉）。

①『論語』八佾。『四書章句集注』の読みによる。

②『易』革卦彖傳に「湯・武 命を革めて、天に順いて人に應ず」。

清朝は創業より仁義を行っており、わずかの兵力で天下を支配することができたのも、すぐれた道徳の心があったからだというのである。

ここで雍正帝が主張したかったのは、清は明から政權を奪ったものではなく、徳を持っていたためにおのずともたらされたものであるという考えであった。それが、華夷を超越した「天命」を承けたという発言となる。

夫れ我が朝は既に天命を仰ぎ承け、中外の臣民の主と爲れば、則ち撫綏愛育を蒙る所以の者は、何ぞ華夷を以てして殊視すること有るを得ん。中外の臣民 既に共に我が朝を奉じ以て君と爲せば、則ち歸誠（投降）効順（投誠）す。臣民の道を盡くす所以の者、尤も華夷を以てして異心有るを得ず（『大義覺迷録』巻一・二葉）。

ここでは、清朝のどの皇帝の時から「天命」をうけたか明言しないが、華夷を超越した絶対的な存在である「天命」を承けたということを正統性の根拠とする。雍正帝のこの意見は、清朝の中国支配に反対するものへの最終的な回答であった。

ただ、順治帝の時には、様々な事情から、まだそこまでの自信に満ちた主張はなされていない。では、中国支配が始まったばかりの時には、この問題がどのように考えられていたのだろうか。

まず順治年間に述べられた最初の中国支配に関する発言としては、順治元年（一六四四）五月二日に多爾袞^{ドルゴン}が北京に入城した三日後の五月五日になされたものがある。

大清の攝政王 南朝の官民人等に諭すらく「曩者^{さき}に我が國と爾が明朝と和好し永く太平を享けんとして、屢しば書を致すも答えず。以て四次^{たび}深入す

るに至れば、爾が〔明〕朝の悔悟するを期すのみ。詎ぞ意 堅執にして従わざらんや。今、流寇の滅する所を被る。事 已往に屬し、必ずしも論ぜざるなり。且つ天下は一人の天下に非ず①、軍民は一人の軍民に非ず。徳有る者、之を主（つかさ）どる。我 今 此れに居り。爾が〔明〕朝の爲に君父の仇を雪ぎ、釜を破し舟を沉め（決死の覚悟・『史記』項羽本紀）、一賊滅せざれば、反轍せざるを誓う。過ぐる所の州縣、能く髪を削りて投順し、城を開きて款を納るる者は、即ち爵禄を予え、世々富貴を守らしむ。如し抗違し遵わざれば、大兵 一たび到りて、盡く屠戮を行なわん。志有るの士 幹功立業の秋なり。如し信（やくそく）を失うこと有れば、將た何を以て復た天下に臨まんや」と（『国榷』卷一百一・思宗崇禎十七年）。

- ①『孟子』萬章上の「萬章 曰く『堯は天下を以て舜に與う、と。諸 人有りや』と。孟子 曰く『否。天子は天下を以て人に與うること 能わず』と」の『四書章句集注』の朱熹注に「天下なる者は天下の 天下にして、一人の私有に非ざるの故なり」。

清王朝は和平を望んでいたのに明王朝が応じなかった。そのうちに李自成に滅ぼされてしまう。そこで、「天」が徳あるものに天下をあたえるという『孟子』の議論を踏んで、明王朝の仇である李自成一を討伐するために中国本土に進出したというのである。

清王朝が天下を支配する徳を有しているという主張は、康熙年間以後重視される。しかし、ここの宣言においてもそれほど強く主張されているようにはみえない。もし、清王朝が「徳有る者、之を主とする」ということをつよく主張してゆけば、いわゆる「天命」を得たためということに結びついてゆくことになる。崇禎帝が亡くなったこの時期であれば、明王朝の「天命」を清王朝の順治帝が受け継いだと主張できたであろうが、順治帝の先々代のヌルハチ（太祖）・先代のホンタイジ（太祖）については整合して説明できなくなってしまう。そもそも「天命」は、一国にしかあたえられないものであり、ヌルハチ（太祖）・ホンタイジ（太祖）の時には、明の太祖以来、天命を受け継いでいる明王朝の皇

帝が存在していたからである。そのため、この時期の主張は、明王朝の仇を討つために中国に進駐したという道義的立場からのものが主となる。

また、六月十五日には江南の人たちに対して次のような詔が出されている。ここでも、ただ、中国を救うために侵出してきたと述べるのみである。

辛未、清虜 詔を江南の人に馳せて曰く「予（^{ドルゴン}多爾袞） 聞くに共に天を戴かざる者は、君父の仇なり①、災を救い患を^{あわ}卹れむ者は、隣邦の義なりと②。惟れ爾が大明の太祖高皇帝、胡元を斥遂し、我が仇國を剪（ほろぼ）し、永世に民を宥し、代ごも哲王有り。末造に迄び、吏 偷み、民 窮まり、羣盜 野に滿つ、然れども大行崇禎皇帝 恭儉の心を秉り、仁孝の行いを弘くし、徳 高く世 替わる。〔しかし〕 惟れ日々不寧にして、蠢茲する逆賊の李自成なる者、狗盜の雄にして、鷗張（きょうぼう） 獸視して、累世の深恩を忘れ、滔天の大惡を逞（ほしいまま）にし、京師に蹂血（大量殺人）し、皇后に逼隕し、宮寢を焚焼し、縉紳を流毒し、金銀を以て營窟と爲し、百姓を視ること草菅の如くす。『皇天 震怒し』（『書經』泰誓上）、日月 光無し。我が大清皇帝 義 切に仇を同じくし、恩深もて弔伐す。六師 方に整い、蟻聚（結集）し忽ち奔りて、虜遺（殘敵）を斬滅すること、川盈谷量（きわめて多い）にして、游魂 西遁し、指日（日ならずして）遺を擒えん。〔こうして〕 予（^{ドルゴン}多爾袞） ^{もつ} 用て馬を燕京に息め、茲の黎庶を撫す。〔そして、亡くなった〕 爾が大行皇帝（崇禎帝）の爲に縞素三日し、喪祭して哀を盡くす。飲みて謚して懷宗端皇帝と曰い、陵を思陵と曰う。梓宮 ^{ここ} 率に新たにし、寢園 増ます固し。凡そ諸々の后妃、各々禮を以て葬り、諸陵の松柏 樵すること勿れ。惟れ爾が率土の臣民の情を大行皇帝に致さんと欲する所の者なり。我が大清 ^{つぶ} 曲さに斯の誠を體せざる無く、崇ぶこと有りて闕くこと靡し。宗藩の失職流離する者は、爾が爲に存卹（救済）し、士紳の忠節もて難に死する者は、爾が爲に表揚し、刑を軽くし賦を薄くし、賢を用いて能を使い③、苟（まこと）に生民を濟い、『惟れ力のみ是れ視る』（『春秋左氏傳』僖公二十四年）。深く爾が明朝の嫡胤の遺無く、勢い孤 立

ち難きを痛む。[そこで] 我が大清の宅を此の北地に移し、『兵を厲^とぎ、馬にまぐさ秣し』（『春秋左氏傳』僖公三十三年）、必ず醜類^{ほろ}を殲^とばし、以て萬邦を清くす。[清王朝は]『天下を富めりとするの心有るに非ず』④、實に中國を救うの計を爲す……』と〔割注:中書舍人の華亭の李雯⑤が草する所なり〕（『国権』巻一百二・思宗崇禎十七年六月辛未〔十五日〕条）。

①『禮記』曲禮上には「父の讐は、與に共に天を戴かず」とあり、「君」字はない。

②『春秋左氏傳』僖公十三年に「天災 流行するは、國家 代ごも有り。災を救い隣を恤（あわれ）むは、道なり。道をおこなうえば、福有り」。

③『周禮』天官・大宰に「八統を以て王に萬民を馭することを詔^つぐ……三に曰く賢を進むこと、四に曰く能を使うこと……」。

④『孟子』滕文公下に「四海の内 皆な曰く『[湯王は] 天下を富めりとするに非ざるなり。匹夫匹婦の爲に讎を復するなり』と」。

⑤注(1)参照。

崇禎帝の時になって、李自成が明王朝を滅ぼしたので、その仇を討つために軍事行動を取って、民衆を救ったという。そして、崇禎帝に諡号を贈ったりして、礼を尽くした。ただ、明王朝に正統な後継者がいなかったため侵出してきたが、決して「天下の富を目当てにする（天下を富めりとする）心」からではなく、「中國を救う」ためであったと主張するのである。

また、この時、^{ドルゴン}多爾袞は、南方にいる史可法に降伏を勧める書簡を送り、史可法はそれに返書を書く。ここでも^{ドルゴン}多爾袞は明朝のための仇討ちというものを中国進出の理論的根拠とした。そして、南京に成立した福王政権を『春秋』の義例によって非難する。

[明王朝の遺民が南京で自立していると聞が] 夫れ「君父の讐は、共に天を戴かず」①と。『春秋』の義に「賊の討たざる有れば、則ち故君 葬を書せず」②して、「新君 即位すと書すを得ず」③と。「亂臣・賊子」④を防

ぐ所以にして、[その] 法 至りて嚴なり（この往復書簡は諸書に引用され文字に少しづつ異同がある。拙稿では蔣良騏『東華錄』巻四に引用されるものによる）。

①『禮記』曲禮上には「父の讐は、與に共に天を戴かず」とあり、「君」字はない。

②『春秋公羊傳』隱公十一年冬十一月条に「春秋は君 弑され、賊討たざれば、葬を書せず。以て臣子無しと爲せばなり。子沈子 曰く『君 弑され、臣 賊を討たざれば、臣に非ざるなり。子 復た讐せざれば、子に非ざるなり。』春秋 君 弑され、賊 討たざれば、葬を書せず」とは臣・子に繋がざればなり』と。

③『春秋公羊傳』桓公元年春王正月条に「弑君を繼げば、即位と言わず」。

④『孟子』滕文公下に「孔子 『春秋』を成して、亂臣・賊子 懼る」。

李自成が討伐されていないのに、南京で福王が「即位」したことを『春秋』の義例を用いて非難するのである。

^{ドルゴン}

多爾袞は続けて言う。

闖賊李自成、兵を稱^あげて闕を犯し、君親（君主）を荼毒（そこな）うも、中國の臣民、「一矢を加遣（やりとり）する」①を聞かず。平西王の吳三桂、

✓（1）『大義覺迷錄』によると、曾靜の発言として、次のように伝える。

李雯 華亭の人。甲申（順治元年〔一六四四〕）の後、北幕に入る。「與史道鄰（史可法）書」及び「下江南詔」は皆な其の筆なり。[「下江南詔」の] 中に「六合 一にして、泰階 平かなり」・「禮學 興りて干戈 息む」の句有り。人 傳えて之を嗤う（『大義覺迷錄』巻四・四葉）。

この李雯は、

李雯、字は舒章、江南の上海の人。力學して古えを好み、陳子龍と名を齊しくす。明の崇禎の間、雯の父の逢申 謫戍（在官者が犯罪によって革職、辺外に發遣され、戍役にあたること）を被る。而るに其の罪に非ざれば、雯 叩闕陳辨し白（弁明）するを得。闖賊 京城を破るに洎^{およ}び、[父の李] 逢申 節を盡くして死す。順治の初め、廷臣交ごも雯の才 用う可しと薦め、内院中書を授けらる（『國朝耆獻類徵初編』巻百三十九・十七葉所引『述聞謹瑤錄』）。

というような人物であった。

東陞に〔介〕在し、獨り包胥②の哭を効す。朝廷（清王朝）其の忠義に感じ、累世の夙好（もとからの友誼）を念い、近日の小嫌（ちいさなわだかまり）を棄て、爰に貔貅（勇猛な軍隊）を整え、梟獍を驅除す。入京の日、懷宗帝（崇禎帝）・〔皇〕後の諡號を首崇し、山陵に葬るをト（うらな）い、悉く典禮の如くす。親〔王〕・郡王・將軍以下、一（もっぱ）ら故封に仍り、改削を加えず。勲戚ある文武の諸臣、咸な朝列に在りて、恩禮加うる有り。耕市（農民・商人）驚かず、秋毫も擾（みだる）るなし。方に秋高の氣爽に③擬して、將を遣りて西征し、檄を江南に傳え、兵を河朔（黄河以北）に聯ね、「師を陳ね旅に鞠」（『詩經』小雅・采芑）げ、「力を戮^あわせ心を同じくし」（『春秋左氏傳』成公十三年）て、乃（なんじ）が君國の仇に報じ、我が朝廷の德を彰かにせんとす。豈に意わんや、南州の諸君子、旦夕に苟安し、事機を審らかにせず、聊（いささ）か虚名を慕い、頓（にわか）に實害を忘る。予（^{ドルゴン}多爾袞）甚だ之に惑う。國家（清王朝）の燕都に撫定するは、乃ち之を闖賊に得る、之を明朝に取るに非ざるなり。賊明朝の廟主を毀ち、辱先人に及ぶ、我が國家（清王朝）「征繕（収税して武備を整える）の勞を憚らず」④、「悉く敝賦^{もと}を索め」（『春秋左氏傳』襄公八年＊貧弱な武器をかきあつめ）、代わりて爲に恥を雪ぐ。孝子・仁人、當に如何ぞ恩に感じ報を圖らん。〔しかるに〕茲に乃ち逆寇の稽誅され、王師暫息するに乗じて、遂に江南に雄據し、坐して漁人の利を享けんと欲するは、諸を情理に揆して、豈に平と謂う可けんや……（同上）。

①『春秋左氏傳』成公十二年に「如し天の福にて、兩君相^{まみ}い見えれば、亦た唯だ是れ一矢以て相い加遺する無らんや」。

②春秋・楚の申包胥＊呉に滅ばされかけた楚の使者となって秦へ行き援軍を得ることに成功する＊『春秋左氏傳』定公四年に見える。

③杜甫「崔氏東山草堂」詩に「高秋の爽氣 相い鮮新」。

④『春秋左氏傳』僖公十五年に「征繕を憚らず」。

李自成が北京を陥れて皇帝を弑したのに、臣下のものは仇討ちをしなかった。

ただ、呉三桂が頼んできたので、清王朝は援軍を送り討伐した。そして、皇帝・皇后を禮をもって葬った。したがって清王朝は、明朝から北京を奪ったのではなく李自成から得たものである。代わりに仇を討ってもらったことを感謝すべきなのに、何もせずに江南で政權を立て漁夫の利を得ようとするのは、正しい行為であろうかという。

これに対して史可法は、福王の即位の様子を述べ、李自成討伐と崇禎帝夫妻の葬儀を執行してもらったことなどに感謝して、次のように返事する⁽²⁾。

……『春秋』の大義を引きて、來りて相い詰責す、善いかな、言、推して之を言うこと。然れども此の文 列國の君 薨じ、世子 應に立つべきも、賊の未だ討たざる有れば、其の君に死すとするを忍びざる者の爲に説を立つるのみ（蔣良騏『東華錄』卷四①）。

①『明季南略』（卷之二）によると、史可法のこの返書は何亮工が代作したものであるという。

何亮工は、南直桐城縣の人なり。宰相の何如寵の孫なり。亮工少くして逸才有り。時に史道隣（史可法）の幕賓と爲る。此の書は乃ち其の手筆なり。順治丁酉（十四年〔一六五七〕）に及び、亮工 孝廉（舉人）に擧げらる。南京の武定橋に家す。

『春秋公羊傳』の義例は、この場合はあてはまらないとする。そして、『資治通鑑綱目』の事例を持ち出して、歴史上にも今のような状態があり、「正統」はこちらにあると説明する。

若し夫れ天下の共主（天子） 身は社稷に殉じ、青宮（太子の居城）の皇子 慘變（悲慘な出来事）ありて常に非ずして、猶お即位せずの文に拘牽するがごときは、「一統を大（とうと）ぶ」（『春秋公羊傳』隱公元年）の義

（2）『小腆紀年』（卷七）に、

考えるに曰く、史公（史可法）の答書は〔順治元年〕九月十五日と爲す。而るに諸書は皆な此の事を七月に載するは、蓋し是の時、南北 間阻され、七月に使を遣りて、九月に至りて始めて達すればなり。『東華錄』 此を載せて六月の事と爲す。とある。

に昧きに坐するがごとし。中原 鼎沸し、倉卒に師を出だせば、將に何を以て人心を維繫し、忠義〔の士〕を號召せん。紫陽が『[資治通鑑] 綱目』は、事を『春秋』に踵ぎ、其の間 特書するは、如え^{たと}ば、「[王] 莽 漢の鼎を移し、光武 中興す」、「[曹] 丕山陽（漢の獻帝）を廢し、昭烈（劉備） 踐祚す」、「懷〔帝〕・愍〔帝〕 國（西晉）を亡ぼし、[東] 晉の元〔帝〕 基を嗣ぐ」、「徽〔宗〕・欽〔宗〕 蒙塵（国外に移る）し、宋の高〔宗〕 統を續^つぐ」①なり。是れ皆な國仇 未だ翦（ほろぼ）さざるの日、亟やかに正位の號あるも『[資治通鑑] 綱目』 未だ嘗て自立と爲すを斥けず、率ね皆な正統を以て之に予う。甚だしきは玄宗の〔逃れて〕蜀に幸し、太子 靈武に即位するに至るや、議する者 之を疵とするも、亦た未だ嘗て以て「權を行なう」②を許さざるにあらず。其の舊物を光復するを幸いとするなり（同上）。

①このことは『資治通鑑綱目』ではなく、明の商輅の『續資治通鑑綱目』卷十一に見える。

②『春秋公羊傳』桓公十一年に「權とは何ぞや。權とは經^{つね}に反して、然して後に善有る者なり。權の設くる所は死亡^おを舍きて設くる所無し。權を行なうに道有り。自ら貶損し以て權を行なう。人を害し以て權を行なわず。人を殺し以て自ら生くると、人を亡ぼし以て自ら存するとは、君子 爲さざるなり」。

そして、「正統」を有している明・福王政權の立場から、賊を驅逐してくれたことはありがたいとする。

本朝（明王朝） 世を傳えること十六〔世〕、正統 相い承け、冠帶の族（中国）を治めてより、「絶えたるを繼ぎ、亡ぶを存し」①、仁恩 遐被（遠くまで及ぶ）す。貴國 昔し先朝に在りては、夙に封號を膺し、「載〔書〕は盟府（文書保管所）に在り」（『春秋左氏傳』僖公二十六年）。[こうした事情は] 寧^あに聞かざるや。今、心を本朝（明王朝）の難に痛め、亂逆を驅除するは、大義 復た『春秋』より著（あきら）かなりと謂う可し（同上）。

- ①『春秋公羊傳』僖公十七年に「桓公 嘗て絶えたるを繼ぎ亡ぶを存するの功有り」。

続けて、夷狄の契丹・ウイグルがそれぞれ宋・唐を援助した前例を持ち出して、そうした前例に背くような清朝の行為は「義を以て始まり利を以て終わる」ものであると述べる。

昔、契丹 宋と和するや、止だ歳輸 金繒を以てするのみ。回紇の唐を助くるや、原とより其の土地を利（むさぼら）ず。況んや貴國 篤く世々の好（よし）みを念い、「兵 義を以て動かし」（『三国志』武帝紀）、萬代 瞻仰せしむるは、此の一舉に在り。若し乃ち我が難を蒙むるに乘じ、好を棄て仇を崇とび、此の幅員（疆域）を窺えば、[それは]「徳を爲すに [最後まで] 卒えず」（『史記』淮陰侯傳）[ということである]。是れ義を以て始まり利を以て終わる、賊人の竊笑する所と爲るなり。貴國 豈に其れ然らんや（同上）。

中国支配の「正統」はこちらにあり、また清朝が「徳を爲す」というものの最後まで「卒え」ていないと言いつ返すのである。

やはり明朝のために仇を討ったと称して北京を占領しただけでは、南京に明の国祚（国運）を承けたと称する福王政権が存在する以上、いくら經学的な議論を行なっても、やはり中国支配の正統性は主張しにくかったのであろうか。この後、福王政権との間にこうした議論はなされなかったようである。

さて、順治帝は順治元年十月乙卯（一日）に皇帝に即位したことを南郊に詣りて天地に報告している。

我が國家 天眷（『書經』大禹謨「皇天眷命，奄有四海，爲天下君」）の佑を受け、東土に肇造（『書經』康誥「用肇造我區夏」）し、烈祖（創業の先祖『書經』伊訓） 鴻緒（王業）を邁圖し、皇考（曾祖・父祖・父） 彌いよ前猷（先王の計画）を廓（ひろげる）し、遂に舊邦（『詩經』・大雅・文王「周雖舊邦，其命維新」）を^{おこ}舉し、^{おおい}誕に^{あた}新命に膺り（『書經』武成）、朕（順治帝）の^{こと}服を^{こと}嗣ぐ（『詩經』・大雅・下武）に迫る。冲齡と雖も、締念 紹庭

(『詩經』・周頌・訪落) し、「永く綏厥の位を綏^ず」(『書經』微子之命)。頃者(このごろ)、賊氛(敵の凶暴な氣勢)^{しきり さかん} 浚^に熾^{にして}、明朝に極禍す、是れ托重する親賢を用いて民の塗炭を救い、乃ち方に金鼓を馳せ、旋いで澄清を奏し既に「倒懸を解き」(『孟子』公孫丑上)、「天下を富めりとするに非ず」(『孟子』滕文公下)、王公列辟(諸侯)、文武の羣臣、暨^び軍民耆老合詞して勸進し懇切なること再三なれば、乃ち今年十月初一日に於いて祇^{つし}みて天地・宗廟・社稷に告げ、皇帝の位に即く……(『中央研究院歷史語言研究所現存清代內閣大庫原藏明清檔案』第一冊・A2-12: 中華民國七十五年刊)。

この宣言文では、「誕に新命に膺^り」と述べているところが注目される。おそらく、ここは『書經』武成の「克^く厥^の勳^をを成^し、誕^に天命に膺^り、以て方夏を撫^す」をふまえているのであろうが、「新命」は『書經』においては「天命」となっているのである。⁽³⁾ 清王朝の「皇考」が「新命に膺^り」ったとしていることは、明王朝への配慮と、「天命」をいつの時期に享けたのかが漠然としてはっきりしなかったことがその原因であろうか。

では、南京の福王政権が滅ぼされたときは、どのような宣言がなされたのか。乾隆四年(一七三九)重修『世祖實錄』の記載であるが、順治二年[一六四五]六月二十八日の「南京の平定するを以て河南・江北・江南等の處に頒赦するの詔」に次のように述べる。

[順治二年] 己卯(二十八日)、南京の平定するを以て河南・江北・江南等の處に頒赦するの詔に曰く「光岳(三光五岳・天地のこと) 合し、泰階平かなり①。南北 一にして、兵戈 息む。^{ここ} 粵に往古を稽(かんが)うるに②符を同じくせざるはなし。本朝(清) 國を立てて有年、幅員(疆域) 既に廣くして、醇樸もて治を爲し、[他國を] 併兼(併吞する)するを^{おも}意^うこと無し。向來(これまで)、疆場(戰場) 兵を構うるも、本より

(3) 乾隆四年(一七三九)重修『世祖實錄』(卷九・順治元年十月乙卯(一日)条)に記載される、宣言文とは、おおきく異なっている。また、「新命」は「天命」に改められている。

「言^{こと}に好（よし）を歸（通じ合う）」③せんとするを欲す。期せずして寇兇 禍を極め、明の運 永しえに終う。是に於いて旅を整えて關に入り、[明朝に] 代わりて爲に恥を雪ぐ。猶お賊の渠（首領） 未だ殄くさず、起居に違あらざるを以て、二王に随命し、「師に誓いて」（『書經』大禹謨）西討す。而るに南中^{すき} 讐に乗じて君（福王）を立て、妄りに尊號^{いつわ}を僭り、國恤を念うことなく、亟^{しば}しば亂政を行ない、重ねて人民を困しめ、四海に不義の名を負いて、東南[の人々が] 向化（帰服）するの路を阻む。朕（順治帝）是を用て夙夜 祇だ懼れ、瑩黎（弱者）を救わんことを思い、西賊 既に擢きて、旋いで南伐を命ず。上は「祖宗の休烈」（韓愈「順宗實錄三」）に託し、下は叔父（多爾袞^{ドルゴン}）の謨を成すに籍り、定國大將軍の豫親王 扶義にして東し、兵 頓刃（駐屯）すること無くして、河南・江北 次第に歸誠す。[そして] 甫めて維揚（揚州）に克ち、江左を随えて平らぐ。金陵の士女「我に紹^うぎて休（美命）を見る」④、既に福藩（福王）を獲え、南土 畧ぼ定まる。此れ従り「徭を軽くし賦を薄くし」（『北史』齊孝昭帝紀）、昇平に漸進す可し。將來、「度を制し、文を考え」⑤、徐に「禮樂を興さん」⑥ことを冀う。朕（順治帝）「峻命^{やす}の易からず」⑦を念い、斯民の孔艱を悼み、深く切に痼癘（いたみ病む）し、宜しく詿誤（あざむきまどわす）^{つつし}を矜むべし。特に大なる賚（たまわりもの）を弘くし、「維新」（『詩經』大雅・文王）に與かるを嘉す。有^{たも}つ所の河南・江北・江南等の處の地方、合に恩例を行なうべし……」（乾隆四年重修『世祖實錄』卷五・順治二年六月己卯条）。

- ①天下太平の意＊左思「魏都賦」に「故に斯の民をして泰階の平を睹て、屋^{なら}を比べて一と爲す可からしむ」。
- ②『書經』堯典に「日若（古文は「粵若」に作る）に古の帝堯を稽（かんが）うるに……」。
- ③『春秋左氏傳』僖公九年に「凡そ我が同盟の人、既に盟するの後、言^{こと}に好を歸す」。

- ④『孟子』滕文公下に「『書』逸文にある周王朝の初めに、東の攸國に遠征した状況は」臣爲らざる攸有り。東征して厥の士女を綏んず。厥の玄黄^{はこ}を匪にし、我が周王^つに紹ぎて休を見る。惟れ大邑 周に臣附す」。
- ⑤『中庸』第二十八章に「天子に非ざれば、禮を議せず、度を制せず、文を考えず」。
- ⑥『史記』樂書に「傳に曰く『治定まりて功成り、禮樂 乃ち興る』と」。
- ⑦『大學』傳十章に引く『詩經』。『詩經』大雅・文王は「峻」を「駿」に作る。

明王朝の国運が尽き、賊によって滅ぼされたので、代わりに賊を討伐した。また、南方では皇帝を僭称したものが人民を苦しめたので、討伐したというのである。ここでも、中国支配の正統性には触れられておらず、明王朝の仇と皇帝を僭称したものとを討伐したことを中国支配の理論的根拠としている。

実際のところ、清王朝は、南京の福王政権を滅ぼしたこの時期に明の「正統」を受け継いだと主張してもよかったと考えられる。ただ、この時期は完全に中国全土を支配下においたわけではないので、統一による正統性（歐陽脩のいう「統」）は主張しにくかったかもしれない。また、清王朝が行なおうとした明王朝のために敵討ちを行なったという道徳的な面からの正統性の主張にしても、史可法のまだ「徳」を尽くしていないという批判や異民族政権ということが引っ掛かりとなり、十分に主張できなかったのだろうか。

しかも、明王朝と清王朝とをどこで区切るかが問題となる。魏・呉・蜀の三国鼎立時代に対する正統性についての議論を見てもわかるように、「正統」は同時にふたつの政権にあたえられない。すると、すでに述べたように明朝の皇帝が存在していた時期のヌルハチ（太祖）・ホンタイジ（太祖）の取り扱いをどうするかが問題となる。しかし、この時期、明確な方針はなかった。これらの問題は⁽⁴⁾棚上げされたままにされていたのである。

このように、中国本土の支配がはじまった順治朝の初期において、清王朝の中国支配の大義名分は、明王朝の国運が尽き、賊によって滅ぼされたので、代わりに賊を討伐した、その結果、中国を支配することになった、というものであった。この時期には、明王朝と清王朝との間の「正統」関係を明確にし、清王朝の正統性を宋代以降の正統論の流れのなかに位置付けることは行なわれなかったのである。

更にいうと、明王朝の桂王（永明王）がビルマで捕らえられた康熙元年〔一六六二〕において、明王朝が滅亡し、清王朝がその正統性を受け継いだとの宣言がなされてもよかったと考えられる。何故なら、華夷の別を非常に厳しく主張する『續資治通鑑綱目』（明・成化十二年〔一七四六〕勅撰）においてさえ、厓山で南宋が完全に滅びると、元王朝に「統」を与えているからである。⁽⁵⁾ただそうしなかったのは、清王朝にとって中国を統一したという観点からは、正統性の主張は可能であったものの、華夷の別の観点からすると、それを乗り越える正統性についての理論を導きだすことは困難であったためであろうか。また、四人の満州旗人の輔政大臣が実際の政治を担当していたことも関係しているかもしれない。

では、華夷の別、つまりは漢民族と満州族との関係については、この時期の清

✓（４）もっとも、この問題は『資治通鑑綱目三編』（乾隆十一年〔一七四六〕）が編纂された時でも、そのままになっており、最後まではっきりとした見解は示されなかったようである。

ただ、乾隆四十六年〔一七八一〕十月十六日に乾隆帝は次のように述べている。

宋の葉隆禮 奉勅もて撰する所の『契丹國志』有り。……中間 體例 混淆し、書法 譌舛すること、一として足らず。……甚だしきは遼帝の紀元を上到大書し、宋の〔太祖〕の建隆等の年號を以て下に分注するに至りて、尤も紕繆と爲る。夫れ梁・唐・晉・漢・周は僭亂の主にして、國を享くこと日 淺く、且つ或いは遼に於いて臣と稱し・兒と稱し・孫と稱すれば、紀元を分注するは、尚お可なり。北宋の若きは、則ち中原 一統すれば、豈に春秋分國の例を以て、概むね北の遼の下に分注するを得んや……（乾隆四十六年十月十六日上諭『四庫全書總目提要』卷首所収）。

中国を統一した北宋の時には、北方の一地域にあった遼を正統として認めないと言うのである。これを、清王朝と明王朝との関係にあてはめてみると、明王朝の皇帝が存在していた時期のヌルハチ（太祖）・ホンタイジ（太祖）には正統を与えないということを暗に示したのであろうか。

王朝はどう考えていたのであろうか。

周知のように、清王朝は中国支配を始めた順治二年（一六四五）六月十五日に薙髮令を出す（乾隆四年重修『世祖實録』卷十七・順治二年六月丙寅（十五日）条による）。これに対してたいへんな反発が起こる。そのすぐ後に、次のようなことがあった。

原任の陝西河西道の孔聞諤 奏言すらく「臣が家の宗子の衍聖公の孔允植

已に四氏の子孫を率いて、之を祖廟に告げ、俱に令に遵がいて薙髮し訖る。但だ念うに先聖 典禮の宗爲りて、顔・曾・孟の三大賢 並び起ちて之を羽翼す。其の定禮の大なる者は、衣冠より要なるは莫し。先聖の章甫縫掖（冠と衣装）①は、子孫 世世之を守る。是を以て漢より明に暨ぶまで、制度 各々損益（『論語』爲政）有りと雖も、獨り臣の家の服制、三千年來、未だ之れ改むること有らず。今、一旦變更すれば、皇上（順治帝） 崇儒重道の典に於いて、未だ備わらざる有るを恐る。應に蓄髮し以て先世の衣冠を復すべきや否やは、惟れ聖裁に統ぶ」と。[それに対して] 旨を得て「薙髮の嚴旨は、違える者は赦す無し。孔聞諤の疏もて蓄髮を求めるは、已に赦されざるの條を犯す。姑らくは聖の裔なるを念いて死を免れしむ。況んや孔子もて聖とするの時、此れ制に違うに似て、伊の祖の時中②の道に玷（きず）つくること有らんや。著して革職して永しえに叙用せざらしめよ」と（乾隆四年重修『世祖實録』卷二十一・順治二年十月戊申（三十日）条* 蔣

（5）明朝では、元王朝の正統性はどのようにとらえられていたものであろうか。明の成化十二年（一七四六）に勅撰された『續資治通鑑綱目』の凡例に次のようにある。

凡そ中國 正統と爲し、夷狄 紀元を得ず〔割注:遼・金・夏は皆な紀せず。漢・唐の例に倣う〕。金・元 中原を得るに及び、然る後に 紀年を宋の年の下に分注す〔割注:晉・魏の例に倣う〕。

凡そ夷狄 統を干すに、中國の正統 未だ絶たざれば、猶お之を中國に繋ぐ。夷狄 天下を全有し〔割注:元の世祖を謂うなり〕、中國の統 絶つに及び、然る後に統を以て之に繋ぐ。其の間の書法は、亦た異なる有り〔割注:中國 兵を稱する者有れば、「反叛」と書せざるの類の如し〕。中國 義兵の起こる有れば、即ち之を列國に夷す〔割注:秦・隋の末の如し〕（『御批續資治通鑑綱目』凡例・二葉）。

夷狄には、できるだけ統をあたえたくないとするのである。しかし、元王朝は夷狄ではあるが、中国を統一した時になってようやく統をあたえるというものであった。

良駙『東華錄』巻五では八月に掛けている)。

- ①『禮記』儒行に「丘^{わか}少きとき魯に居り、縫掖の衣^きを衣る。長じて宋に居り、章甫の冠を冠す」。

- ②『中庸』第二章に「君子の中庸は、君子にして時中す……」。

孔子の子孫の孔聞諱が、これまでの礼制を変更しないために薙髮令に対する特例を認めてほしいと提案するが、拒否されているのである。これは、当初清王朝が漢民族の伝統的文化に対しても、高圧的な政策をとろうとしたことを示している。

ところが、順治六年（一六四九）になると、その高圧的な態度も変化し始める。きわめて異例のことであるが、順治六年四月の殿試において、「満・漢」についての対策が⁽⁶⁾出題されたのである。

古より帝王 天下を以て一家と爲す。予（順治帝） 中原に入りてより以來、満・漢 曾て異視する無し、而れども遠邇（遠近）の百姓 猶お未だ風（教化）を同じくせざるがごとし。豈に満人 質を尚（たつと）び、漢人 文を尚び、習俗 或いは同じかざればなるか。抑そも音語 未だ通ぜず、意見 偶殊にして、畛域 尚お未だ化せざればなるか。今、満・漢を聯して一體と爲し、之をして同心合力せしめ、歡然と問^{へだ}つこと無からんと欲す。[こうしたことは] 何れの道にして可なるか……（『歴代金殿殿試鼎甲硃卷』清代試題試卷・順治六年己丑科条・花山文藝出版社刊・四三六頁：『世祖實錄』巻之四十三・順治六年四月庚子〔十二日〕条所収のものは節略されている）。

これに対して、一甲二名（旁眼）となった湖北・漢陽出身の熊伯龍（字は次侯，又字は塞齋，號は鍾陵。康熙八年〔一六六九〕五十三歳で卒）は、次のような対策を出す。

伏して制策を讀むに云えらく、「満・漢 曾て異視する無し、而れども遠邇

(6) いわゆる「対策」の出題は、いくつかのパターンがあり、受験者はそれに対応して事前に策題の腹案を考えていたようである。ちなみに、康熙から光緒までの間はおおむね、四項目が交互に出題されている。

の百姓 猶お未だ風を同じくせざるがごとし。困りて疑いを尚文・尚質の習俗の同じからざるに致す」と。睿慮 此れに及ぶは天下の福なり。夫れ滿人 興王の里に生まれ、風雲の勢いに乗じ、聖化に狎むこと最も久し。故に安意肆志にして、疑畏する所無し。漢人 寇虐より以來、萬死の餘に出で一生を得る。悲鳴するの孽（卑しい者たち）の如きは、弦の聲を聞きて墜ち、其の氣 弱くせざる能わず、其の心 危うくせざる能わず。故に其の太平の福を望むや、更に滿人より急なり、而して其の朝廷の此の太平を致す所以を望むや、亦た更に滿人より甚だし、此れ以て大いに其の「太平を致すという」心を厭（満足）^{へだ}さすこと有るに非ざれば、以て之をして歡然として「滿・漢を」問つこと無からしむこと無きなり。蓋し滿人の質と漢人の文とは、習と性とに成りて強いる可からざるなり。然れども近者、科目の屢しば^{ちかごろ}行なわれ、郊禘の備舉・成均の造就・國史の纂修・召對の儀有り・宴賞の典有るは、皇上 一に文事を以て天下を治む。其の意 方且に滿を易えて漢と爲すなり。豈に徒に異視すること無けんや……（「廷試策 順治己丑科一甲二名」『熊學士文集』卷之下・策・五十葉）。

熊伯龍は、滿人がその質を尚ぶこと変更して文を尚ぶことになってきているので、どうして漢人が「異視すること」が起こるであろうかと述べる。この対策が、一甲二名となっていることは、滿人たちは文化的には漢人たちに従属すべきだということを清王朝が容認していることを示しているのではないだろうか。

特にこの熊伯龍は、

紀文達（紀昀）師 曰く、國朝の制義、自ずから劉黃岡（劉子壯）・熊漢陽（熊伯龍）・李文貞（李光地）・韓文懿（韓爌）を以て四大家と爲す……、と（『制義叢話』卷之八・一葉）。

と言われたり、

孟瓶菴（孟超然、字は朝舉、又字は瓶菴。福建閩縣の人。乾隆二十五年〔一七六〇〕庚辰科の二甲十一名の進士）師 曰く、往時 選家の本朝の時文を評論するに、首に熊鍾陵（熊伯龍）を推し、次に劉黃岡（劉子壯）に及ぶ……、

と（『制義叢話』巻之八・一葉）。

とされたりするように、清朝初期における八股文の名手であった。ということは、この対策も受験生にとって必読の文章であるといってもよい。その内容が、以上のようなものであれば、中国全土の漢民族の読書人に対する宣伝効果はきわめて大きかったと言えるのではないだろうか。

このように清王朝が、漢民族の文化を尊重するという態度をとると、儒教的政治思想を濃厚に身に着けた官僚たちは、中国を統一したという現実（理念上統一したというものである。実際には各地で反乱が続き、亡命政権も存在していた）に立って、観念的に儒教的政治をとるように新しい異民族の支配者に要求するようになる。

そして、それをこれまでの正統論の流れに結びつけて、いわゆる道統を継承した聖人が存在するような政治を行なってもらいたいとする。それが、清王朝の正統性の証明にもなるとしたのである。やはり、清王朝に仕える官僚たちは、明王朝のためにあだ討ちを行なったというだけでは、「正（道徳性）」による正統論には無理があると考えたのではないだろうか。

くり返しになるが、正統論は、北宗の歐陽脩が新しい理論を提出して以来、「正（道徳性）」と「統（統一）」という二つの要素が含まれることになる。歐陽脩は、統一を前面に出して北宋王朝の成り立ちを理論づけ、南宋の『資治通鑑綱目』は、道徳性に重点を置いて、南半分に追いやられた立場を説明する。また、元末の漢民族の楊維禎は、漢民族の立場から異民族の元の正統性を証明しようとした。だが、それは異民族は被支配者である漢民族の精神（道統）を受け継ぎ、精神的に従属しなければならないという大前提のうえでのものであった。明初の方孝儒になると、『資治通鑑綱目』の立場を推し進めたうえで、道統の継承者が正統性を示すという楊維禎の考えを発展させ、君主が道統を承けていることが正統性の証明であるとした。明末には、正統性の体现者が君主から聖人へと変化する。そのうえ、異民族の元王朝を追い出して中国を統一した明王朝の性格から激しい攘夷思想（夷夏の別）が加えられた。それは、明末の社会情

勢からさらに過激化する。こうして、清王朝が中国を支配するようになった時期には、いわゆる道統を継承する聖人の存在がその王朝の正統性を表わすものというようになってきた。清王朝に仕える官僚たちの主張はこうした流れに沿ってのものだったと考えられる。

たとえば、順治九年〔一六五二〕に曹本榮（明・天啓元年〔一六二一〕～清・康熙三年〔一六六四〕）は徳治を行なうために「經筵講義」の開設を求める。その理由として、順治帝が親政してから、すぐれた政治を行なっているのに、災害などが起こるのは、聖学が行なわれていないからだ⁽⁷⁾と述べる。なお、計東の「清故中憲大夫内國史院侍讀學士曹公行狀」（『改亭集』卷十六・十五葉）にはこの疏は「詔有りて嘉納さる」とある。

編修の曹本榮 應詔して奏言すらく、「皇上（順治帝）親政して以來、良法美意 漸く見われ施行さる。而るに猶お水旱^{いた} 洊臻り、星辰 次を失うは何ぞや。誠に聖學 未だ講ざれず、紀綱 未だ張らざるを以てなり。何をか聖學と謂わん。皇上（順治帝） 二帝三王の統を得れば、當に二帝三王の學を以て學と爲すべし①。凡そ四書六經及び『資治』通鑑』の中の身心をして治平の大道に務むる者を^{もと}要めしめ、内は則ち朝夕に討論し、外は則ち經筵に進講すること有れば、君徳 既に成りて、天命②自ずから相い與に流通せん……」と（乾隆四年重修『世祖實錄』卷六十九・順治九年十月庚申（二十二日）条）。

①計東の「清故中憲大夫内國史院侍讀學士曹公行狀」（『改亭集』卷十六・十五葉）には、この疏が引用され、この箇所を「皇上（順治帝）二帝三王の統を得れば、則ち當に二帝三王の學を以て學と爲すべし」としているのに従って読んだ。

②『春秋左氏傳』宣公三年に「今、周の徳 衰うと雖も、天命 未だ改

(7) 曹本榮のこの意見は次で述べる熊賜履の意見の先取りに近いものがある。なお、曹本榮と熊賜履とは、切磋琢磨しあった仲だという。

〔熊賜履は〕黄岡の曹厚菴（曹本榮）と相い劇切（切磋琢磨）を爲す（魏裔介『兼濟堂文集』卷四「熊敬菴閑道錄序」）。

まらず。鼎の輕重 問う可からず」という時の「天命」、つまり天から授けられた統治権の意味か。

曹本榮は、順治帝が「二帝三王の統を得」ているので、「二帝三王の學を以て學と爲す」べきだという。「二帝三王の統」というのは、これまで見てきた「正統」の意味の「統」を指していると考えられる。すると、中国を統一したという観点から正統性を持っている以上、続いて二帝三王（聖人）の學を修めて、その裏付けを得るのであるならば、徳による治世を行なうことができ、「天命」も得られるという主張となる。曹本榮は、すでに順治帝は「統」を得ていると理解している。順治朝初期における正統性の問題は、そのままにうやむやとなり、およそ十年にわたる中国支配の現実が、なしくずし的に清朝が「統」を得ているということに結びついていったのであろうか。

ところが、順治帝は儒家的な統治法にしたがうことだけが天下を治めるのではないと考えていた。

朕（順治帝） 惟うに、天下を治むるには、必ず先ず人心を正す。人心を正すには必ず先ず邪術を黜（しりぞ）け、儒・釋・道の三教 並びに垂れ、皆な人をして善を爲し惡を去り、邪を反し正に歸し、王法に遵がい禍患を免れしめん（乾隆四年重修『世祖實錄』卷一百四・順治十三年十一月辛亥（七日）条）。

そのために二帝三王の治世と順治帝の治世とを、儒家の二帝三王（聖人）の學を媒介として結びつけ、そこから清王朝の正統性を導くことができるという儒教的な主張のみには同意しなかったと考えられる。

実際に、この中国支配の正統性と徳治との関係に注目したのは、幼年期より儒教的な教育を受けてきた次の康熙帝である（拙稿「青年康熙帝の学力と官僚」〔和歌山大学経済学会『経済理論』第308号・2002年刊〕参照）。二十代後半までの康熙帝は、中国統一という立場から与えられる正統性だけではなく、華夷の別を乗り越えた正統性をも得たいと考えた。そのため、当時のいわゆる道統を継承した聖人がいれば、正統性が認められるという正統論の流れをうけて康熙

帝自身がそれになればとよい考えた。康熙帝は二十代後半の頃までは、雍正帝が主張したような「天命」という絶対的權威で、漢民族をひれ伏そうとは考えていなかった。自分自身が絶対的權威となり、漢民族を統治しようとしたのである。そのため、康熙帝は、素直に、先ず自分自身を修養して、まわりを感化し、最終的には、天下を平らかにするという、中国の伝統的政治思想、近世では特に朱子の『大學章句』以来、説かれ続けてきたものを実行しようとした。

このような康熙帝の考えに影響をあたえ、その方向性を示したのは熊賜履（明・崇禎八年〔一六三五〕～清・康熙四十八年〔一七〇九〕）である。(2)で述べるように熊賜履は、道統を継ぐ人物として聖人ではなく康熙帝をあて、康熙帝は治統と道統との体现者、つまり正統性の体现者になれると述べた。若かった康熙帝はこの意見に興味を示す。その結果、熊賜履はしばらくの間、十代後半であった康熙帝の学術顧問となることに成功する。

ただ、拙稿「李光地と熊賜履」（上）（下）（和歌山大学経済学会『經濟理論』第252号・第253号・1993年刊）で検討したように熊賜履は道学者とは思えないようなことを行ない失脚してしまう。その次にあらわれるのが高士奇（順治二年〔一六四五〕～康熙四十二年〔一七〇三〕）であり李光地（明・崇禎十五年〔一六四二〕～清・康熙五十七年〔一七一八〕）である。とくに李光地は、熊賜履の理論を学ぶ。それは、たとえば、李光地が康熙十九年〔一六八〇〕閏八月に康熙帝に提出した『讀書筆録』及び論説序記の雜文を進むの序」にあきらかであろう。

臣愚 無知なるも、竊かに謂えらく、皇上（康熙帝）〔の學問〕は漢・唐以下〔の學者の〕學にあらず、唐・虞・三代の學なり（『榕村全集』卷十・「進讀書筆録及論説序記雜文序」）。

先ず、康熙帝の學問を、堯・舜・夏・殷・周の理想的な時代と意識されたものと同じである、という。李光地はさらに続ける。

臣また道統と治統とを觀るに、古は一に出づるも、後世は二に出づ。孟子 堯・舜以來より文王に至るまでを序じ（『孟子』盡心下・公孫丑下にも「五

百年にして必ず王者の興るあり」とある), 率ね五百年にして一續を統ぶるは、此れ道と治との一に出づるものなり。孔子より後、五百年にして〔後漢の光武帝の〕建武（二五年～五六年）に至る。建武より五百年にして〔唐の太宗の〕貞觀（六二七年～六四九年）に至る。貞觀より五百年にして南渡（一一二七年〔南宋高宗・建炎元年〕）に至る。夫れ東漢の風俗「一變すれば道に至らん」（『論語』雍也篇）。貞觀の治効は〔周の〕成〔王〕・康〔王〕に幾し。然れども律するに純王を以てすれば、愧ることなかるあたわず。孔子の東遷に生まれ、朱子の南渡（南宋）に在りて、天 蓋し付するに斯道（『論語』雍也篇）を以てするも、時 逢わざるは、此れ道と治との二者に出づればなり。朱子よりしてこのかた、我が皇上に至るまで又た五百歳、王者の期に應じ、聖賢の學を躬ずからす。天 其れ殆ど將に復た堯・舜の運を啓き、道と治との統を復た合わさんか（同上）。

『孟子』公孫丑下の「五百年にして必ず王者の興るあり」を踏んで、康熙帝を朱子を継ぐ皇帝であると称賛するのである。つまり、清朝の正統性の体现者とするのである。

張舜徽（一九一一年～一九九二年）などは、この文章を引用し「斯の論の若きは、上（康熙帝）に諂うに工なりと謂う可し」（『清人文集別録』卷三・「榕村全集四十卷」条・中華書局・一九八〇年刊）として李光地を批判する。ところが、こうした表現は、当時の朝廷にいて、康熙帝に接近しようとする野心家の官僚であれば、皇帝に対して発言の機会があればよく述べられたことである。

では、続けてこの「治統」と「道統」とを利用してどのようにして熊賜履が康熙帝に接近していったかについてを検討してみたい。

（つづく）